

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじお5・5

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 9 二〇二二年十一月八日

梢

小林章子（RSKアナウンサー）

伊藤正弘（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらつしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。今日もよろしく願います。

伊藤 こんにちは、よろしく願います。

白根 こんにちは、よろしく願います。今日は、永瀬さんが生涯慕い続けた宮沢賢治さんへの思いを書いた詩を紹介したいと思えます。永瀬さんは、賢治さんへの思いを詩や随筆に書いています。これからご紹介する「梢」という詩は、賢治さんに向けて書かれた詩です。

梢

私はほんとにわづかなものを愛してゐます

私にはほんの少しのものでいいのです

でもこんなに悲しみに命中してゐる時に、何と書いたらいいのでせう。ことに私の愛してゐる僅かのものについては。

人々はそんな小さいことをきいて、たゞ笑つてしまふでせう。

だから私はこんなに美しい樹木をみてゐる方がいいのです。

今日の風の中にあんなに倒れんばかりに嘆きよぢれ、どよめき、まるで海

緑色の雪崩のやうです

私の心はまるで一羽の弱い蝶のやうにその中にたえだえに駆け入つてびつ

たり一本の幹に押しついてしまふ。

幹と共にゆれ乍ら私は何を考へたらいいでせう。梢の方ばかりながめて、茫

然と眸をひらいてみると、宮沢賢治さんが緑の中から漂々ひょうひょうと降りて来

て、私の肩を叩き、

「こころのめくら、こころのめくら」とわらつて云ふのです

（『五人』第八集 一九三二年七月）

小林 この詩の最後「こころのめくら」という表現は、現代の人権擁護の見地に照らして不当、不適切な表現ですが、一九三二年の作品発表時の時代的背景、また著者が故人であるという事情に鑑み、そのまま朗読しました。

伊藤さん、この「梢」はどんな印象でしょうか。

伊藤 ちょっと悲しい詩なのかなと思つたんですが、何かを「愛してゐる」というところで、どこかに向かつてゐる、死に直面して死に向かつてゐるのかなと感じました。

小林 白根さん、この詩の冒頭に「悲しみに命中している」とありま

すが、どんな悲しみだったのでしょうか。また、伊藤さんの感想をどんなふうひょうひょうに受けとめていらっしやいますか。

白根 伊藤さんのご感想に驚かされました。この詩は、一九三二年の春に永瀬さんの従兄が亡くなったときの、やり場のない悲しみを書いた詩です。この従兄は、永瀬さんが詩人を志した時に、広く学ぶことが必要なだと心理学や経済学など様々なジャンルの本を紹介して、応援してくれた人だったんです。

小林 応援してくれた人が亡くなるということは、悲しみも一層深かったでしょうね。ですから、伊藤さんが感じたように、死に向かっているようなところもあるんでしょうか。

白根 そうだと思います。

小林 そして、詩の最後に宮沢賢治さんが登場しますね。なぜ、宮沢賢治さんだったのでしょうか。

白根 永瀬さんは、一九三二年の春に草野心平さんから賢治さんの詩集『春と修羅』を手渡されています。当時の永瀬さんは、自分が書きたい詩のイメージがつかめておらず、どうしたらよいか悩み迷う日々でした。そんなときに賢治さんの詩に出会い、自分が書きたいのは、賢治さんのように物事の本質を表現できる詩なんだと気づいたのです。

小林 永瀬さんは、宮沢賢治さんの詩集に影響を受けた、といえるのですね。その「宮沢賢治さんが緑の中から漂々と降りて来て…」というのは、悲しみの日々の中でも、宮沢賢治さんのように本質を表現していかなければいけないと改めて気づいた、ということでしょう。

うか。

また、「漂々と降りて来て」という表現から、私は、宮沢賢治さんの死後に書かれたかのような印象を持っていたのですが、この詩が発表された当時はご存命ですね。

白根 そうなんです。宮沢賢治さんが亡くなられたのは一九三三年ですからご存命でした。詩「梢」を発表した雑誌には、朗読されたように「宮沢賢治さんが緑の中から漂々と降りて来て」とあります。この詩句は詩集に収録する時には削除していますが、永瀬さんが『春と修羅』について書いた文章とともに、賢治さんの生前に書かれています。

小林 そうなんです。ところで、今回改めて「梢」という言葉を辞書で調べましたら、「枝の先」という意味なんです。永瀬さんは、この詩を「梢」と名付け、その「梢の方ばかりながめて」と表現されていますが、どんな思いが込められているのでしょうか。

白根 永瀬さんは、「梢」という詩で、詩を樹木にたとえています。具体的には、賢治さんのように物事の本質を表現できる詩を「美しい樹木」や「幹」にたとえて賢治さんへの憧れを述べ、そのように書けない自分を折れやすい「梢」にたとえて、賢治さんのように詩を書けない悲しみ、さらには従兄が亡くなった悲しみを織り込みながら表現しています。永瀬さんの詩には、樹木を書いたものが多くあります。永瀬さんが樹木のような詩を書きたいと願ったことを思いながら、それらの詩を読んでいただくと、新しい発見があるのではないのでしょうか。

小林 ところで、「梢」が発表された一九三二年、宮沢賢治さんは世間ではどのような評価をされていたのでしょうか。

白根 草野心平さんや永瀬さんが詩を教わった佐藤惣之助さんなどが、賢治さんに注目していました。賢治さんは、生前無名だったと言われていますが、このことについても研究が進められています。

小林 そうなんですね。宮沢賢治さんは「梢」が発表された翌年に、急性肺炎でお亡くなりになったんですね。

白根 永瀬さんは、『春と修羅』について書いた文章を読んでもらうことも、賢治さんに会うことも叶いませんでした。草野心平さんはさらに永瀬さんを賢治さんの追悼会に誘ってくれました。一九三四年二月に開かれた追悼会には、弟の清六さんがトランクに入れて賢治さんの原稿を持ってきてくれました。そのトランクのポケットの中に、「雨ニモマケズ」が書かれた手帳が入っていたんですね。

小林 かの有名な「雨ニモマケズ」は、手帳に書かれた言葉で、それまで公表されていなかったのを、永瀬さんたちが見つけたんですね。

白根 そうなんです。永瀬さんは手帳発見の証言者として、その時のことを繰り返し書いています。「雨ニモマケズ風ニモマケズ」の字句を「異様に強く私の心にくい込んだ」と書き、さらに「2Bの鉛筆ではないかと思うような太めの鉛筆の文字は、今もこの目の底にあり、その時、私をはじめ見て見た賢治の文字は消え去らない」と非常に強い印象をもったことがわかります。

小林 「雨ニモマケズ」は、いまでも多くの人の心を励ましていますよね。

白根 はい。永瀬さんは長い年月をかけて、「雨ニモマケズ」は、賢治さんが「世界のすべての人の幸福を希うがために」たどり着いた「祈り」だという考えに至りました。東日本大震災、西日本豪雨、現在のコロナ禍のなかでも、「雨ニモマケズ」が読まれているのは、そうした賢治さんの「祈り」に励まされているのではないのでしょうか。

小林 そうですね。そう思うと、手帳に書かれた言葉を永瀬さんたちが発見したということは、うれしいことですね。

伊藤 しかも、この「梢」が発表された翌年に賢治さんが亡くなっているということですから、そこにも縁みたいなのを感じますね。

白根 そうですね。

小林 今日は、永瀬清子さんと宮沢賢治さんについてお話をいただきました。白根さん、ありがとうございました。

伊藤 ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。

※記載されている情報は、二〇二一年十一月八日現在のものです。

〈参考文献〉

永瀬清子「宮沢賢治のほとり——「雨ニモマケズ」を貫った」『海鳴り』七号
一九九〇年十月

平澤信一「宮沢賢治〈生前無名〉神話の再検討」『宮澤賢治研究 Annual』vol. 10
二〇〇〇年三月

白根直子「永瀬清子の〈樹木〉をめぐる詩想——詩「梢」と宮沢賢治」『清心語文』第六号 二〇〇四年八月